

日本の学術の発展を考えるうえで、若手研究者の育成と研究業績評価の在り方は焦眉の課題となっています。

「経営学」は、狭義の経営学から会計学、商学、経営工学や情報経営学に至るまで、実に多種多様な領域を擁しており、また経済学や社会学、心理学のほか工学など自然科学系の学問をディシプリンとする領域も含んでいます。この経営学の領域多様性、一つの学としての統合の難しさが即、一元的・統一的な業績評価の困難性と直結します。

現状では、経営学はもとより学术界全体の動向として、査読（ピア・レビュー）に基づいた論文、ランクの高い海外査読誌への掲載実績を高く評価する方向へシフトしてきています。こうした動向それ自体は学術の発展にとって望ましく必要なことです。しかし、こうした外形的基準に基づく評価システムのみが独り歩きしてしまいますと、業績評価は形骸化し、学術の本質が見失われた本末転倒な事態を招く恐れもあります。

日本学術会議においても、こうした点はかねてから問題視されており、いくつかの提言や要望、報告等が発出されてきましたが、とりわけ人文社会科学や経営学においてはその検討が未だ十分ではなく、このまま現状を放置しては、近い将来、学術としての経営学の発展や次代を担う若手研究者の育成が見込めなくなってしまう危惧すらあります。

例えば、査読にパスするためには、かなり極限された領域で研究し、加えてテクニカルな側面も無視するわけにはいかず、研究者はそれに膨大なエネルギーを投下せざるを得ません。わけても若手研究者は、テニユアのポストを得るために、数年のうちに成果をあげざるを得ないというプレッシャーに常に晒されており、長期的な視座における研究や経営学の全体像を意識した研究には取り組みにくい現状があります。

とりわけ経営学をはじめとする社会諸科学においては、既存の視座への批判的吟味やパラダイムの転換、歴史や思想といった要素も研究において極めて重要なはずですが、こうした長期性や全体性を見据えた研究はすぐに成果に結びつかないこともあり、若手研究者は回避しがちです。こうした趨勢は、既存の知見に対する批判的視点の喪失にも繋がりがねず、学術の発展やグローバルな知の開拓にとって、由々しき事態であるといわざるを得ません。

学術の本質は、何よりもまず研究者個人の自由で、創造的・独創的な着想にあるはずです。こうした学術の原点に立ち返り、いまいちど学術研究や業績評価システムの在りよう、若手研究者の育成に関する課題を見直す必要性に我々はいま迫られています。

講演当日は、こうした点に関わる日本学術会議での最近の動向を中心に、私自身の個人的経験や研究も交えつつお話ししたのち、参加各位と意見交換を致したく存じます。